

「自傷行為を考える」  
- 看護師の視点から -

立命館大学大学院  
応用人間科学研究科  
対人援助学領域  
人間形成・臨床教育クラスター  
坂本 まさみ

自傷行為の研究は比較的新しく、1970年以降自殺あるいは自殺企図との関連において理解が求められるようになってきた。

自傷行為は、自分の身体を直接的に損傷する行為を指し、一般にその行為は致死性が低く、しばしば反復されるものであり、複数の方法を持ってなされることが多いとされている。しかし現実には低い自尊感情が自分の存在を脅かすとともに、死を意識した行為も少なくはなく、罪責感が強く存在していることも多い。

人は人との関係の中で成長発達をする一方で、その関係性の中で問題も生じている。この問題には、人と人との関係に欠かせないコミュニケーションにおいて、重要な「ことば」による表現の未熟さから生じる自傷行為や自殺企図という、生命を脅かすほどの「行動」による表現があり、精神科の臨床の場においては、こころの問題として扱わざるを得ないことが現実に生じている。

この論文は、現代社会に生じる自傷行為を取り上げ、社会文化的側面や歴史的背景をもとに、援助職者である看護師の視点から考察を試みたものである。

第1章では、自傷行為の理解ということで、現代社会に生じている自傷行為の実態調査の考察を行い、精神科の臨床の場で自傷行為がどのように扱われているかを述べている。また、自傷行為の定義を明らかにし、現代に生じる自傷を歴史的な側面からからも考察を加えている。

第2章では、筆者が精神科の臨床で関わりを持つことになった自傷行為を繰り返す一人の女性を取り上げ、この女性のアイデンティティの確立を困難にした背景を、本人だけでなく社会病理からも考察を行っている。その中で援助職者としての筆者に何が求められるのかを明らかにする。

第3章では、長期にわたり繰り返された当事例の閉塞した生活に、ようやく光が差し始めたことに注目し、自傷行為からの回復過程として考察している。彼女のこころに何が生れ、育ってきているのか、その中で重要な意味を持つ人との関係を考える。

当事例に対し、繰り返される衝動的で自爆的な自傷行為に、看護師として時間をかけて向き合う中で、「生きる意味」について問われていることを振り返る。さらに、筆者はこの事例との関わりを通じて、個々の患者に対し支えられているという安心感が維持できる関わりを、どのように実践していけばよいのか、そして看護師として寄り添うとはどういうことなのかについて、本事例への関わりを通して考え、明らかにする。